

# 「Remembrance」<sup>ささおか けいこ</sup> 笹岡 啓子

## 第23回 林忠彦賞

### 受賞記念写真展

周南市美術博物館

5月16日(金)～25日(日) 入場無料

9時30分～17時(入館は16時30分まで)



福島県双葉郡浪江町請戸 2013年8月2日

「となりの大槌町はもつとひどい。広島の原因が落ちたみたいだ」  
大震災から1ヶ月後、写真家は釜石の高台に立っていた。どこからともなく聞こえてきた声にすぐさま大槌に向かう。そこには100年に1度あるかないかの戦慄の風景が広がっていた。「想像を超えている」。写真家はついに始めてのシャッターを切った。

第23回林忠彦賞は、2011年3月11日、人類の受難ともいえる未曾有の被害を出した東日本大震災の被災地を訪ね歩き刻々と変わる景状を41巻からなる小冊子で世に問うた「Remembrance」に輝いた。

手にしたのは笹岡啓子さん。1978年広島市生まれ。36歳。写真を学びたいと東京造形大学に進む。そこで講師だった北島敬三氏の写真観に共鳴、以後師事する。在学中に北島氏らと自主運営ギャラリー「photographers gallery」を立ち上げた。すぐに作品を発表、卒業後もここを拠点に精力的に活動を続けている。

テーマは「風景」と「広島」。風景は山の稜線や海岸線など自然と人間とが隣り合う領域を即物的に映像化するもの、「観光KANAKO」「EQUIVALENT」など。一方の「広島」は笹岡さんの故郷でしかも被爆地という特別な場所。幼い頃からの潜在的な記憶の上に東京で暮らして見えてきた外からの眼もまじえその表裏を見つめるもの、「PARK CITY」(2009年)。この二体系が彼女の創作の大きな柱となっている。

そこに3・11が起こった。ここで「風景」と「広島」とが融合する。それ結び付けたのが、原爆の惨状を思い起こさせる三陸沿岸の津波にのみ込まれた町々と福島の放射能汚染の実相だった。

まず大まかに取材地を決める。そして2～3か月に1度の割合で現地に入った。移動は、レンタカー、目的地につくとひたすら歩いた。

震災直後の救済、捜索から瓦礫の片付け、そして時が止まったかのように放置された状態、昨春あたりからの大規模な湾岸工事や造成工事と地域差こそあれ復興は着実に進んでいる。その反面、一向に先が見えないのが放射能汚染である。いずれにせよ風景は絶え間なく変わりとどまることがない。

「その場に自分がいるのなら撮っておかなければ」。

元の地形と震災後の地形、津波被害と原発被害の違い、見える被害と見えない被害など、ことさら差異にはこだわった。タイトルは「Remembrance」。

思い出すことが現在を作り出すという意味も込めた。  
なぜかこの作品群を見ているとその奥底から温もりが伝わってくる。震災を不条理とするのではなくこの地に暮らす人々の嘆き悲しみそして鎮魂、さらには絆、再生、希望へと…。元に戻ることにない中で今後どう生きるかという人間そのものの在り方までもが深くえががれているように思えた。

笹岡さんの究極の言葉がある。「過去の人も見てほしい」。そこには写真家が心眼で捉えた愛すべき東日本の姿がしかと写っていた。

(周南市美術博物館館長 有田順一)

